花となすは、この茵芋なり、其形狀は尙謙の說の如し、又一種綠蔓の種あり、本草綱目啓蒙に見えたり、啓蒙にもれたるは、栗本瑞仙院松問栗答云、みやましきみに似て異なり、箱根山中にあり、此みやましきみの一種、瑞香葉樣物なり、葉は枝端にあり、四葉六葉一所に攢生す、これ本性なり、漢名茵芋此もの一種濶大の物あり、葉の蒂紅色美なり、花實なき時はみやましきみなること的識する者なし、葉紋理なく小皺ありて、瑞香葉に似たり、表深綠にして裏淡しと見えて、圖を載たり、其葉瑞香の葉に似て長大なり、實の赤熟したる枝なり、この瑞香葉の種は蘭山いまだ見ざるにや、啓蒙にのせず、また正二月枝頭に花あり、穗をなすこと二寸計、花の大さ三分五瓣白色と見ゆれども、五瓣にはあらず、尙謙の說の如く、四瓣にして花心は綠色なり、此茵芋山礬馬醉木の三種は、共に白小花を開きて、皆穗をなすなり、その開花も同時なれば、こゝに載れども、古の茵芋につつじの名あるは、卽赤つゝじにして、今の山躑躅なりや、和名抄に羊躑躅茵芋山榴と次第して、山榴和名阿伊豆々之、山石榴也とあれば、本草綱目山躑躅の一名にして、又紅躑躅とも映山紅ともいへり、これはやまつゝじと呼て、山に自生の種なり、この茵芋につゝじの名あるによりて、寺島良安も、茵芋和名有躑躅之號未詳、今躑躅類中無結實者、また茵芋莽草皆古人治風藥爲妙品、近世罕知といひて詳ならざりしを、今は庭園に植て花は春早く開き、實は秋より染なし、赤紅にしてめづべきものなり、此茵芋の名は古く神農本經より見えて、皇國にても本草和名、和名類聚抄にも見えて、につゝじをかつゝじと銘せしは詳ならざれども、茵芋は今いふみやまききみにして、その開くも山礬馬醉木と同じ、花彙にも冬梢間に五出碎花を著くと、その冬開くといへるは、冬より蕾を生ずれば可なり、又五出とあるは誤寫なり、圖には卽四出に書たり、

〔下學集下草木〕馬醉木（アセボ）馬食ニ此葉ノ則死、故云ニ馬醉木ト、有ニ和歌ノ云、取繫、玉田横野、放駒躑躅馬醉花發云々、

〔瑤囊抄六〕アセボト云木ノ毒ナルト云ハ何ゾ、幷其字如何、此木ハ和名ニモ不載侍歟、定テ本名

馬醉木